

## 戦争体験談

大塚 均（昭和2年生まれ）

極寒のシベリア（ロシア）より帰りて、私は傘寿（80才）になりました。これから63年前までさかのぼってみます。

昭和20年の豪雪で交通機関全部が麻痺した1月20日、18才にして、

「お国の為とは言いながら 志願で出てくる馬鹿もある」

と、旧軍隊で歌っていた歌のとおり志願兵として、新発田歩兵16連隊へ入隊。1月23日、新発田出発、韓国釜山港入港して一路汽車で北へ北へと、1月30日に北朝鮮会寧到着。第75連隊第1中隊に所属して、当時の北朝鮮と満州とロシアとの三角地点の国境警備をしながら山の頂上で「タコツボ」と言う穴の中で敵状の監視を続けておったが、8月に入るとロシア軍機の機銃掃射を受けながら、8月18日山の上で終戦を聞くと共に不当侵入してきたロシア軍によって捕虜にされ、銃を捨てさせられて満州の図們市に何万人もの日本の旧兵隊だった人が集結させられ、9月20日、東京ダモイ（帰る）と言いながら貨車に乗せられ、北のハバロフスク市を過ぎ、右へ進み、9月27日、1週間目にハバロフスク市とカラフト本島の間のコムソモリスク市第18地区、第7收容所に着く。「働かざるものは食べるべからず」と共産主義国家の命令のため「ノルマ」（作業量）を課せられ、零下30度以下でも伐採作業、道路や鉄道等の建設で寒さと「シラミ」、夜になると「ゴキブリ」になやまされ続きだった。そのため、21年2月、急性肺炎になり40度過ぎの高熱で「8日間」、死の境をさまよったが、幸いにして30日で全治して元気になった。

思い出すと2か年の間、毎日作業の量によって1食当たり100グラム前後の黒パンと塩味の具の入っていないスープしか食べさせてもらえず、寝てもさめても毎日腹がすいていて、郷里のおいしい食べものばかりを夢に見たり、思い出したり、友と話し合ったりだった。また、作業に出たときにカエル、ヘビ、カタツムリ、木の幹の中にいる幼虫、草や木の芽を食べながら、何としてもでも元気で日本へ帰りたい、帰りたいの一念でした。

そんな食べものばかりのため、全員が「栄養失調症」にかかっており、毎日毎日友が日本へ帰りたい帰りたいと言いながら死んでいきました。私は幸いにして栄養失調症を患いながら、2年9か月余りで、22年10月3日、第一大拓丸の引き揚げ船で、ロシアのナホトカ港より夢に見、また友と語り合った、日本の舞鶴港に上陸し、無事に父、母、兄弟の待つ古里へ帰ることが出来ました。

生きている捕虜生活体験者とロシアで死んでいった友の分まで、絶対戦争をしてはいけないと誓いたいと思っております。